

ケータイ・ライフスタイルの時系列的考察Ⅱ

ースマホの登場によるケータイ機能利用の構造変化ー

飽戸 弘¹ 栗原 一浩² 吉良 文夫² 松本 健太郎² ○栗原 俊介² 水野 一成²

¹東京大学名誉教授 ²NTTドコモ モバイル社会研究所

1 研究背景

本報告は、2011年に報告されたケータイ機能に着目した利用スタイルの構造変化[1]の先行研究を基に、最新の動向を調査した結果の速報である。先行研究では、ケータイの機能が貧弱だった2003年と、2010年のケータイの機能利用を比較し、ケータイ・ライフスタイルの社会的分布について考察している。2003年では、メール、カメラ、ゲーム、テレビ、電子マネーなどの機能は必ずしも使いやすいとは言えないものであったが、2010年にはケータイの機能の利便性向上・多様化の結果、ユーザはライフスタイルや嗜好に合った機能・サービスを取捨選択する傾向が現れていた。

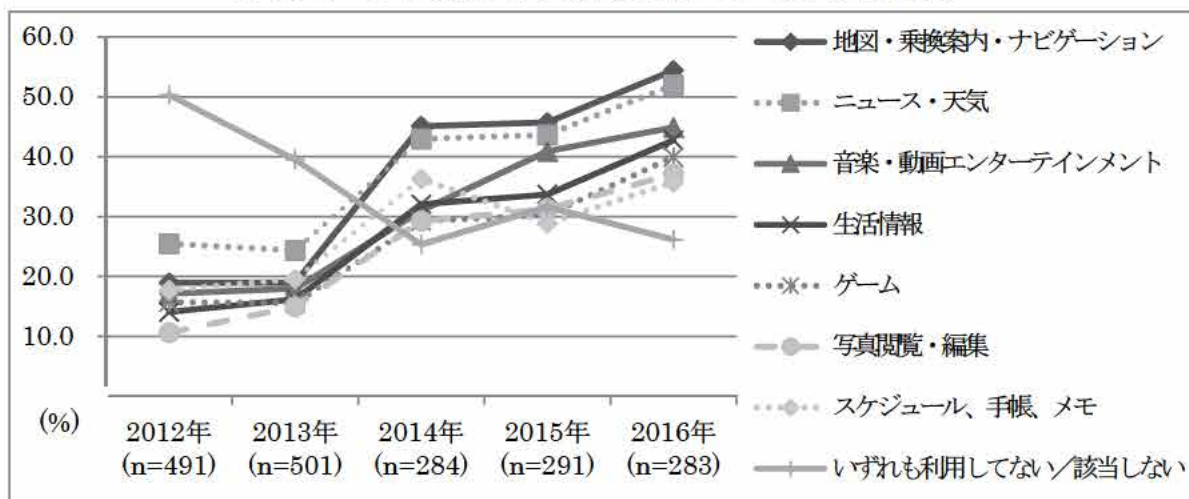
その後のスマホの登場により、操作性が向上し、スマホやケータイで良く利用される機能や利用ユーザの社会分布（性年代・職業等）にも大きな変化が生じていると思われる。モバイル社会研究所では、2012年にケータイの機能利用に関する調査項目を見直し、現在まで毎年継続して調査を実施している。従来型のケータイの所有率が減少に転じた2012年に2割程度であったスマホ所有率は、2016年現在、過半数を超えた[2]。本稿では、この2012年から2016年の調査結果に基づき、ケータイの機能利用の構造変化を検証したい。

2 調査概要

2012年と2016年に、下記の方法でケータイ機能利用に関する調査が行われた。

- ・調査時期：2012年1月、2016年1月に実施。
- ・調査対象：2012年調査は日本全国の15歳以上の男女。2016年調査は首都圏(1都6県)在住の15歳以上の男女。
- ・標本抽出法：性、年代(5歳刻み)、居住地別に人口分布に比例してサンプルを回収。
- ・サンプルサイズ：2012年調査は536、2016年調査は300。
- ・調査方法：いずれも訪問留置調査による。

図1. ケータイでどのような機能を用いているか(複数回答)



3 調査結果

3-1 単純集計

調査結果について、第1に、単純集計での変化を図1に示す。2012年から2016年にかけて「いずれも利用していない/該当しない」と答えた方が20ポイント程減少する一方で、「地図・乗換案内・ナビゲーション」、「音楽・動画エンターテインメント」、「生活情報」が特に増加している傾向が見られた。

3-2 2012年調査でのケータイ機能利用の構造と類型

第2に2012年調査の13の項目について因子分析を試みたものが表1である。下記のように「情報共有・SNS」、「手帳・辞書」、「情報収集・ナビ」、「動画・ゲーム」の4つの因子が抽出された。

表1、ケータイ機能利用の因子分析(2012年)

	情報共有・SNS	手帳・辞書	情報収集・ナビ	動画・ゲーム
ミニブログ (Twitter など)	0.62	0.20	0.17	0.16
SNS (Facebook など)	0.60	0.08	0.22	0.17
ファイル保存サービス	0.60	0.15	0.07	0.13
写真閲覧・編集	0.39	0.34	0.10	0.36
ブログ	0.37	0.27	0.27	0.31
スケジュール、手帳、メモ	0.24	0.63	0.22	0.09
辞書	0.12	0.62	0.16	0.17
ニュース・天気	0.10	0.20	0.58	0.30
地図・乗換案内・ナビゲーション	0.32	0.34	0.53	0.03
生活情報	0.10	0.22	0.41	0.41
電子書籍 (マンガを含む)	0.09	0.06	0.32	0.09
音楽・動画エンターテインメント	0.29	0.15	0.20	0.61
ゲーム	0.16	0.06	0.34	0.39

これら4つの因子を用いてクラスタ分析を行った結果、表2のクラスタ1よりクラスタ4までの4つのクラスタが析出された。

いずれの機能も利用が消極的なクラスタ1、動画・ゲームを主に利用するクラスタ2、手帳・辞書機能や情報収集等に利用するクラスタ3、いずれの機能も積極的に利用する傾向のあるクラスタ4であり、表2のように命名した。

表2、ケータイ機能利用のクラスタ分析(2012年)

	クラスタ1	クラスタ2	クラスタ3	クラスタ4
	消極派	コンテンツ利用派	ツール利用派	積極派
構成比	68%	14%	13%	5%
n	332	70	65	24
情報共有・SNS	-0.2	-0.1	-0.2	3.0
手帳・辞書	-0.2	-0.2	1.2	0.8
情報収集・ナビ	-0.3	0.5	0.9	0.6
動画・ゲーム	-0.3	1.3	-0.1	0.7

3-3 2016 年調査でのケータイ機能利用の構造と類型

第3に、2016 年調査の 12 の項目について因子分析を試みたものを表 3 に示す。「情報収集・ナビ」、「テキスト・写真」、「SNS」、「動画・ゲーム」の 4 つの因子が抽出された。

表 3、ケータイ機能利用の因子分析(2016 年)

	情報収集・ナビ	テキスト・写真	SNS	動画・ゲーム
ニュース・天気（動画、音声含む）	0.82	0.14	0.24	0.19
生活情報（グルメ、ショッピング等）	0.64	0.34	0.25	0.21
地図・乗換など位置情報活用アプリ	0.56	0.24	0.25	0.29
ファイル保存サービス	0.08	0.63	0.20	0.18
電子書籍（マンガを含む）	0.14	0.59	0.17	0.17
スケジュール、手帳、メモ	0.47	0.55	0.08	0.13
写真閲覧・編集	0.35	0.47	0.23	0.26
辞書	0.27	0.44	0.15	0.09
ソーシャルメディアでの音声通話	0.19	0.28	0.72	0.12
ソーシャルメディアでのメッセージ	0.34	0.21	0.65	0.25
音楽・動画エンターテインメント	0.30	0.33	0.20	0.76
ゲーム	0.29	0.21	0.27	0.37

これら 4 つの因子を用いてクラスタ分析した結果を表 4 に示す。クラスタ分析の結果、2012 年と同じクラスタが析出された。2003 年と 2010 年のケータイ機能利用の変化を比較した先行研究では、ケータイの普及に伴い、クラスタに変化が生じていたが[1]、ユーザのライフスタイルや嗜好に合ったケータイの機能・サービスが 2012 年にある程度確立していたことにより、類型に大きな変化が生じなかったのではないかと考えられる。しかし、いずれの機能も使っていないという「消極派」のクラスタに属する人の割合が 2012 年の 68%から 2016 年の 39%に 29 ポイント減少するなど、直接比較することはできないが、クラスタ内の構成比に変化が生じていることが示唆された。

表 4、ケータイ機能利用のクラスタ分析(2016 年)

	クラスタ 1	クラスタ 2	クラスタ 3	クラスタ 4
	消極派	コンテンツ利用派	ツール利用派	積極派
構成比	39%	24%	18%	19%
n	110	69	51	53
情報収集・ナビ	-0.8	0.4	1.0	0.3
テキスト・写真	-0.3	-0.1	-0.4	1.0
SNS	-0.3	-0.5	0.2	1.0
動画・ゲーム	-0.5	1.0	-0.8	0.6

4 ケータイ機能利用クラスタの社会的分布

ケータイ機能利用のクラスタが、どのような属性の人で構成されているかを検証するため、(1)性年代、(2)職業、(3)ケータイの種類、(4)SNS 利用の回答が、各クラスタにどのように分布しているかを示したものが、表 5、表 6 である。

表5、ケータイ機能利用の各クラスに属する人びとの特徴(2012年)

	消極派	コンテンツ 利用派	ツール 利用派	積極派
(1)性年代	-	10代男性、 30代女性	40代女性	10代女性、 20代男女
(2)職業	-	-	-	会社員・学生
(3)ケータイの種類	従来のケータイ	従来のケータイ	従来のケータイ	スマートフォン
(4)SNS利用	存在自体を知らない	閲覧のみ	閲覧のみ	自ら発信

表6、ケータイ機能利用の各クラスに属する人びとの特徴(2016年)

	消極派	コンテンツ 利用派	ツール 利用派	積極派
(1)性年代	60代以上男女	-	30代男性、 50代女性	
(2)職業	専業主婦・無職	会社員等	-	会社員・学生
(3)ケータイの種類	従来のケータイ	スマートフォン	スマートフォン	スマートフォン
(4)SNS利用	存在自体を知らない	自ら発信	閲覧のみ	自ら発信

(1)性年代の点では、2016年では「消極派」の中で60代以上男女の比率が多くなっており、2012年以降、高齢者以外の年齢層が、「消極派」から他のクラスに移行し、スマホ・ケータイの機能やアプリを利用している人が増加傾向にあることが伺える。加えて、2012年では「積極派」は10代20代が多かったが、2016年では様々な年代の人が属する傾向にあることが伺える。(2)職業の点では、2012年から2016年にかけて、会社員・団体職員の多くが、「コンテンツ利用派」に属するようになり、スマホ・ケータイで音声・動画を利用する人が増えつつある傾向が伺える。(3)ケータイの種類の点では、2012年から2016年にかけて、全てのクラスで、従来のケータイからスマホにシフトしている傾向が現れている。(4)SNS利用の観点では、2012年では自らSNSで発信をしている人は「積極派」のクラスに多かったが、2016年では「コンテンツ利用派」においても自ら発信する人が増加していた。

5 考察

クラス分析の結果、2012年に68%を占めていた「消極派」は、39%に数を減らした。その一方で音楽・動画・ゲーム等のコンテンツをケータイで利用する「コンテンツ利用派」は10ポイント増加し、情報収集やナビ等のツールをケータイで活用する「ツール利用派」は5ポイント増加、いずれの機能も積極的に利用し、特にソーシャルメディアでの音声通話・メッセージをケータイで利用する「積極派」は14ポイント増加した。

2016年現在、「消極派」は、60歳以上の男女が過半数を占めている。シニア世代のICT利用については、本学会で発表予定の『シニアのICT利用に関するライフスタイル・アプローチ』にて報告する。

6 参考文献

- [1] 鮎戸 弘・向田 愛子・野村滋郎 (2011)「ケータイ・ライフスタイルの時系列的考察(1),(2),(3)」『日本行動計量学会第39回大会抄録集』, 1-12,
- [2] モバイル社会研究所, 2016年一般向けモバイル利用動向調査(2016年9月刊行予定)
- [3] 鮎戸 弘・他 (2015)「スマホ時代の動画利用に関するライフスタイル・アプローチ(1),(2)」『日本行動計量学会第43回大会抄録集』, 178-185